

実行委員長 富岡 佳久（東北大学大学院薬学研究科）

第 59 回医療薬学公開シンポジウムは、平成 27 年 10 月 18 日（日）に仙台メディアテークを会場に開催された（東北大学大学院薬学研究科、宮城県病院薬剤師会、宮城県薬剤師会との共催）。テーマは、「薬剤師職能将来と期待 ～チーム医療と地域包括ケアへの貢献～」とし、教育講演 1 名、特別講演 1 名、シンポジウムで 4 つの分野（行政、卸、薬局、病院）の薬剤師の先生に現在までの取組や今後の考えについて講演をいただいた。日曜日の開催にも関わらず、一般 63 名と学生 16 名を合わせて 79 名の参加者があり、うち 43 名が病院関係者でした。

教育講演として、厚生労働省の田宮憲一先生は、社会保証制度改革の動向、医薬分業及び薬局・薬剤師を巡る議論、「患者のための薬局ビジョン」の策定と健康サポート薬局、病院薬剤師への期待について概観し、臨床現場での問題解決能力と患者・社会のニーズへの柔軟な対応、他の職種・薬剤師との連携強化を述べられた。特別講演として、国立保健医療科学院の今井博久先生は、日本の社会が高齢化と人口減少などにより“大きな変貌”を遂げていること、「地域包括ケア地域医療構想・多職種連携・コンコーダンス医療などが要請され、薬剤師の役割も劇的に変化すること」を認識すべきこと、「薬剤師」は激流の中に放り込まれたが、薬剤師の“本質的な機能”を発揮すれば必ず泳ぎ切れること、「薬剤師不要論」を払拭し、“地域医療で必要不可欠な存在”になるべきことを強調された。シンポジウムでは、まず、薬務行政の立場から安藤京子先生（宮城県保健福祉部薬務課）は、現状と課題を述べ、そして今後の取組として、地域医療における薬局在宅医療対応を推進する事業の継続、在宅医療を担う薬剤師の人材育成事業や薬業連携事業の支援、東日本大震災による被災者等に対する多職種連携による地域の見守りへの寄与、薬剤師確保事業への思いを述べられた。医薬品卸の立場から高橋智恵先生（スズケン薬事管理部）は、日本の医薬品流通、その中での薬剤師の役割、卸を取り巻く環境変化を概観し、多様化する医薬品に対して「物流」「情報流」に薬学的見地から専門性を発揮していくこと、行政・製薬企業・医療機関・薬局・地域医療に関わる人々との連携支援を行うこと、予防・治療・介護の各方面における医療バリューチェーンのバックヤード機能としての存在として卸薬剤師の将来を述べられた。薬局勤務薬剤師の立場から島貫英二先生（クオール北海道東北事業本部）は、専門医との医療連携事例、お薬手帳を介した病薬連携副作用マネジメント事例、地域包括ケアへの参画事例、さらに「処方せんがなくても立ち寄れる薬局」やキビタン健康ネットを通じた取組による活躍を紹介した。病院勤務薬剤師の立場から佐賀利英先生（石巻赤十字病院薬剤部）は、東日本大震災に学ぶチーム医療、石巻地域における病院薬剤師の役割を紹介し、入院・外来・在宅を含めた患者中心の地域と連携したチーム医療の大切さと、各部門のスペシャリストであるメディカルスタッフの一員として薬剤師の活躍の場があることを述べられた。

これからの医療の在り方の中で、国民がその自由と尊厳を維持し、健康レベルを維持あるいは改善しながら人生を全うできる形を目指すため、地域包括ケアシステムの構築と各プロフェッショナルの意識改革が進められています。6 年制教育がスタートした薬剤師職能に関しても、国民からの期待が大きいものであることは当然のことと言えます。地域の特色・実情に見合った地域包括ケアシステムを実現・維持するためには、多面からの薬剤師職能の連携と結集も必要になり、さらには新しい職能への進化・対応も必須であると考えられました。

最後にご講演していただきました先生方、座長の先生方、企画・運営にご尽力いただきました分野スタッフ、日本医療薬学会事務局の皆様にご心から御礼申し上げます。